

臨時雇傭制度及びその存続は既に古くから存在する。過去に於ける臨時雇傭制度の繁栄し、

一 臨時雇傭者の中職工、同一作業を繰り返すもの、同一賃銀の支拂を受けるものは、本職工

の賃銀率を低下するもの、これらありしこと。

二 本職工が譲歩するに當り、表切的行為の普及

三 労働者階級の立場としての臨時雇傭工に対する同情の意味等であった。

之を要するに、従来の臨時雇傭制度及對の中心を以て事實並に思惑は雇傭関係を有し、工

馬法の適用保護を受けず、比較的に生活より安定を得たる本職工、職業上、並に所得収入

上からなる競争者排除のため、一つのありわけておつたに過ぎず、従つて善意なる意味に於

ては臨時雇傭工に對する同情となつて現れざるが如くであつた。之れかつて英國等に於て

も具體化されたると云ふ労働貴族のなしたる自己擁護、排他主義、遂ては階級結成の公認

にまで到るべき危険を有する所の自然發生的運動であつたのである。

然るに今や和國資本主義の傾向は、資本の集中を計り生産の合理化を行ひ、生産の制限

と統制とも協定し、以て資本家の競争の排除と、利潤の増大化とも計劃し、之を少數資

本家の金融資本の下に統轄しつゝある。

日本資本主義の、新傾向への急速なる転向は、歐洲戦後の世界的經濟恐慌に基づく景

況と、従つて國內産業の不振による利潤の低下と動搖にある。亦日本資本主義階級が此の不

可避の現象を切掛けとするに當り、全面的に衝突するものは、労働階級の階級的勢力と現

存せる労働条件である。

斯くて産業合理化の発展は必然的に労働大衆を次第とし、組織的に賃銀低下、労働時

間延長等労働者の社会的生活の現状を根底的に破壊し、蹂躪して去つたのみならず資本の極

度の攻勢は、従来全労働階級の血脈を流して確立せられたる階級意識、階級對立等の手當

副産物、殊に手當等の固定的條件の破壊を齎しつゝある。

労働者階級の言論、集會、結社、出版の自由に對する弾壓、ストライキの彈壓、労働組合

の分割的支配による分裂政策、等日雇の登壇と、これら行われつつある諸事である。

臨時雇傭制度の向題は今や、単なる本職工の間に於ける為めの割度にあらずして、従来の

雇傭関係の條件緩和の、一つの手段であり労働條件其他の積極的低下のための用具と